

暗い傾斜

角川小説新書

暗い傾斜



昭和三十七年十月十日 初版発行

定価 貳百四拾円

著者 笹沢左保

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子
東京都千代田区飯田町一ノ二三

発行所 株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見町二ノ七

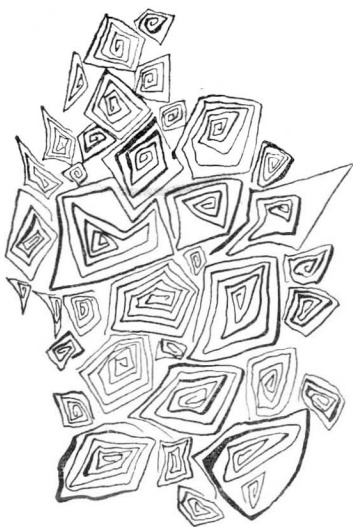
原書口座 東京一九五二〇八番
電話九段通〇一一二(代表)一五

(落丁・乱丁本はお取替之致します)

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

笹 沢 左 保



角川小説新書

目次

第一章 窮地

第二章 死

第三章 反転

第四章 夕映えの道

第五章 動 哭

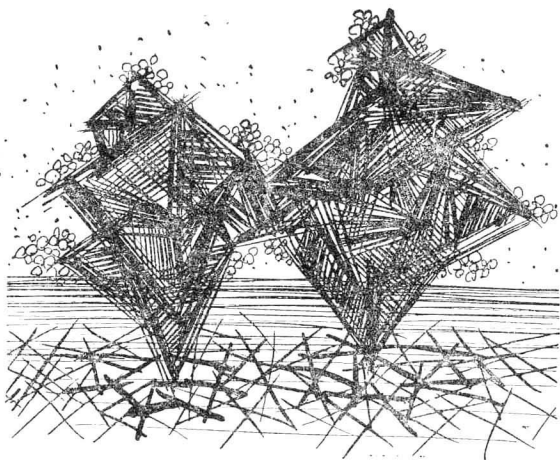
五

六

二〇

二五

三三



第一章 窮地

一

風は南から吹きつけてくる。ガラス戸の外に見えてい
るお休憩所という看板が、間断なく音を立てていた。

風の音は唸り声というよりも、悲鳴に似ていた。限り
ない太平洋の海原を、何ものにも遮られずに渡ってくる
風だった。それは、冬の夜の凍った空気を裂いて、波の
音とともに、凄惨な号泣を続ける。人間の安息や、温か
味のある平和な生活を拒絶するように、風と波の音は、
統制のある反復をやめようとはしなかった。

休憩所の中は薄暗かった。暗くなれば、この地を訪れ
る観光客など、一人もいないからだった。天井から下っ
た裸電球が一つだけ、休憩所の隅を赤黒く照らし出して
いた。半ば闇に溶け込んでいる部分には、ところどころ
テーブルの表面の鈍い光沢が見えている。

牛乳やジュースが並んでいる銀色のアイスボックスの脇で、この店の女が所在なさそうに、生あくびを噛み殺していた。彼女は、一刻も早く店の戸締りをして、家族がいる奥の部屋へ引っ込みたいのに違いなかった。

だから彼女は、時々、裸電球の下の二つの人影へ、もどかしそうに目をやった。その都度、人影が動きそうにないと分かって、彼女は腹立たしげに脚を組み変えた。

坐りの悪い椅子、肘をつくとギシギシ軋るテーブル、何一つ装飾品のない板壁、その必要もないのに水が撒かれてあるコンクリートの床、そして無愛想なくせに客を観察しているような目をする、この店の女——などが、いかにも天然物だけで成り立っている小さな観光地の茶店、という感じだった。

店の女は、耐えきれなくなったように、大きく肩で吐息した。ジュース二本を頼んだだけで、三十分も尻を据えている二人の客が、恨めしさを通り越して、彼女にとっては憎らしい存在だった。客に出て行ってくれというわけには行かない。それだけに、この二人の客のために店を閉めるに閉められないということが、彼女には焦れ

ったかった。

二人の客が、東京から来たらしい若い男女であることも、店の女の反感をそそった。それに、二人が深刻ぶった顔つきで、終始無言でいることが、単純な彼女にとっては鼻もちならないのだ。

彼女は最初、この男女はこれから心中するつもりなのではないのかと、不安を感じた。この土地では、幾度か自殺事件があったからだ。

だが、今の彼女は、この男女が心中するのなら、さっさと店を出て行って、勝手にすればいいのだ、という気持ちになつていた。

彼女はもう一度、二人の客の方を見やってから小さく舌うちをした。男の方は相変らず凝然と、板壁の一点を瞞めていたし、女の方は目を伏せて、虚脱したような横顔を見せていたからだ。

男と女は、全く別のことを考えているようである。互いに視線を合わせようとしなかった。それでいて、相手の存在を無視しているわけでもないらしい。異った感慨にふけりながら、男と女の脳裡には何か相通するもの

があるといった感じだった。

よく観察していれば、この男と女がどういう間柄なのか見当がつく、というカッパルではなかった。親密な仲とは見えないし、そうかと言って、二人の間にある種の葛藤があるとも思えないのだ。それは、二人が同じ目的で行動を共にしているのではない、という証拠でもあった。

男は三十前後というところだろうか。黒いオーバーの襟を立てていることと、髪の毛の手入れが行きとどいていないという点を除けば、平凡なサラリーマンのタイプだった。固く引締った顔立ちだが、その青白い頬のあたりには疲労の弛みがあった。

女は二十四、五に見えた。帽子もオーバーも手袋もコバルトブルー一色で、それが、いかにもお嬢さんといった華やかさだが、さっきから一度も笑いを見せないせいか、印象では彼女を一つ二つ老けさせていた。

二人は恋人同士には見えなかった。夫婦、兄妹、それに職場の同僚——二人の間柄は、そのどれにも当て嵌まりそうになかった。一目でそうと察せられるのは、この

男女が現在、決して幸福ではないということだけだった。

女はこの休憩所で、ついに一言も口にしなかった。男の方は、それでも二度ほど口をきいた。店の女に、

「ジュースを二本……」

と、注文した時と、やがて椅子から立ち上りながら、「行きましようか」

と小声で、女を促した言葉、この二言である。

男に声をかけられると、女は小さく頷いて機械的にハンドバッグへ手をのばした。どこへ行く——という意志の働きは、女にはないようであった。この女の思考には、どこへ行くとか、何をするとかいう未来形のものは一切ないらしい。『現在』という時点にいただけで、彼女はその後目に向けようとはしないのかも知れない。

立ち上った男の背は高かった。それで、俯向きかげんに歩き出すと、彼は猫背になった。女は逆に、やや仰向きかげんに白い顔を上げて男に従った。二人は葬列の最後尾を歩いて行くような足どりで、休憩所を出て行った。「またどうぞ!」

店の女は弾かれたようにガラス戸へ駆け寄って、乱暴

にカーテンを引いた。

戸外に出た男と女は、強い風を正面に受けて一瞬たじろいだ。波の音が俄かに大きくなり、切れ目のない風の悲鳴が、二人の耳を膜で塞いだようだった。

男は先に立って、休憩所の前から鳥居がある方向へ歩き始めた。女は左手でひるがえるオーバーの裾を押さえ、右手を合わせた襟元に当てる、男の後を追った。二人は歸路に付いたのではなかった。鳥居をくぐると、道は細くなり、断崖沿いに海へ向かつてのびているのだ。

右側には熱帯植物のそれに似た細長い葉が繁茂している、左側は灯台の土台になっている土手であった。道は急勾配に下り、やがて右側の樹林が杜切れると、はっと息を呑むほど廣大に視野が開ける。黒い原野のような海が、無限の展開を見せているのだ。斜め背後に小さな岬が重なり合って、それらの断崖の裾のあたりにだけ波の白さがあつた。打ち寄せる波の白さが、線を描いたように殆んど静止して見えるのは、それだけ、この二人の立っている場所が海面より高いからであつた。

道は更に下り、岩石が粘土細工のように積み重ねられ

た間を縫って、やがて岬の尖端に通じている。二人は風に逆らいながら、少しずつ進んだ。波の音はすでに海鳴りに近かつた。風は膨大な空気の移動となつて、人間の呼吸を圧迫した。それらの自然の現象は、怒り狂っているというより、当然の義務としてそうしているようだった。

岬の尖端にたどりついた時、二人は自分たちが陸地にいるのではなく、海の中にいるという錯覚に落ち入りそうであつた。背後を振り向かない限り、視界は全て海と空だけだったからだ。

恰度、大洋を航海中の船の船首に立ったのも同じだった。首を左右にめぐらしても、海と空を区切った水平線以外に目に触れるものはないのだ。

男と女は、この雄大な光景に、長い間見入っていた。風と波の音はあつた。しかし、それはむしろ静寂の音とも言うべきだった。

夜、この岬の尖端へくるような人間は一人もないだろう。そして、人の手によって作られたものは、何一つないのだ。二人は、この瞬間全ての人々から隔絶された

世界にいた。

そこで初めて、二人は隔絶された世間のこと、そこで過して来た自分たちのことを、振り返ることが出来たのだ。

女は吹き飛ばされそうになる帽子をぬいだ。同時に、彼女の髪の毛は殆んど水平に、後へ流れ散った。男のオーダーの襟は、幾度立てなおしても、すぐ折り返された。間もなく二人は、風のなすがままに任せた。尾を引いて流れる星のように、二人の身体にまとった全てのものが、後へ後へとなびいて乱れた。

男も女も、目を細めていた。

伊豆半島の最南端、石廊崎いどうさきの尖端に立って、この二人はまるで、大自然の洗礼を受けているようだった。

強風に海は荒れていた。ところどころに黒いうねりがあった。そのせいもあるのか、また風によって二人の身体が安定しないためのなのか、水平線が傾いているように見えた。それは暗い傾斜であった。

東京、港区の麻布狸穴まんぷらななと六本木の間、小さな交叉点がある。狸穴の方角から来て、これを右へ折れると、住宅地にしては緑の樹木が少なく、商店街にしてはさびれすぎている一角に行きあたる。

三河台町の一部なのだが、この界限だけは妙にくすぶっている街並だった。コンクリート塀に囲まれた空地があるとすると、その隣に新築の魚屋が、開店祝いの花環を並べていたり、白く埃をかぶった老朽家屋と、三階建ての月賦デパートが向かい合っていたり、住人と商店の適材適所については全く無統制な街であった。

太平製作所は、その無統制さの象徴のように、軒を並べた平家建ての人家に密接して、古ぼけた社屋と工場の屋根を見せていた。

太平製作所は、東京酸素の下請会社で、主にポンペの口金部品を製造している工場である。株式会社ということにはなっているが、一昨年までは資本金が五千万円という中小企業で、株の七十パーセントは社長が握ってい

るという、いわば個人会社に毛の生えたような工場だった。

工場の敷地も千坪あまり、工場三棟を除けば、事務室、会議室、社長室のある、二階建て、モルタル建築の社屋があるだけだった。

一月八日の朝、太平製作所へ出勤して来た松島順二は、工場の門へ通ずる狭い路地に、数台の自家用車が駐車しているのを見て、緊張感に頬を硬ばらせた。

今日、朝九時から異例の株主総会が開かれることは、松島順二も前もって知っていた。だが、ここに駐車している車の持ち主たちが株主の一部の者たちだと思えば、松島の気持が平静であるはずはなかった。

これらの株主たちは、総会が開かれる定刻九時より三十分も早く、すでに会社へ乗り込んで来ているのだ。これは株主たちが今日の総会に、極度の関心を抱いている証拠にほかならない。

株主総会が朝の九時から開かれるのも異例なことだし、その株主たちが、社員である松島より早く集まって来ているのも前例のないことだった。それよりもまず、以前

の株主総会のように委任状持参の代理人が多かったのと異り、株主たち自身がこうして車で乗りつけてくるということに、驚かなければならないのだ。

松島は崩れかけた松飾りを横目で捉えながら、工場の門をくぐった。守衛が会釈するのに目だけで応えて、三十歳の総務部長松島は右手にある社屋へ、半ば小走りに入って行った。

今日の事態を敏感に嗅ぎとっているのか、事務室にいた社員たちは窺うような目つきで、お早ようございます、と松島に挨拶した。

松島は『総務部長』という標示のある自分のデスクにカバンを投げ出しただけで、そのまま足をとめずに、事務室を横切った。彼は自分を社員たちの視線が追ってくるのを、背中で感じた。

いつもならば、総務部長の席について、まず工場長と仕事の予定うち合わせを電話連絡する松島である。その彼が、自分の席の前を素通りした。社員たちが、この異常に興味を抱くのは当然だった。

それに、事務室を横切った松島が、どこへ行くのかは

誰の目にも分かることだった。事務室には、出入口のほかにドアが何か所あるだけなのだ。そのドアは、社長室へ通じているのである。

松島はドアの前に佇んで、落ち着け、と自分に囁いてからノックした。

「はい……」

社長室の中からは、事務的な応答があった。松島は開いたドアの隙間に素早く身体を滑り込ませると、なおも彼の背中に喰い込んでくる社員たちの視線を断つように、勢いよくドアを閉じた。

「お早ようございます」

松島は向きなおると、言葉だけの挨拶をして、社長のデスクに近づいた。

「ああ、松島さん……」

社長の汐見ユカはそう言って、回転椅子に張っていた肘ごと、肩をガクッと落した。多分、松島がドアをノックするまで、汐見ユカはデスクに顔を伏せていたのだらう。ユカの白い額に、スーツの袖ボタンの跡らしい赤い斑点が残っていた。

朝から、デスクに顔を伏せていたということは、ユカがいかに苦悩と疲労に虐められているかを物語っていた。そう言えば、いつもは少女のように澄んでいる彼女の眼が、今朝は充血していた。三十二という年齢にはとても見せない艶のある顔の皮膚にも、虫眼鏡で拡大した肌のように小皺が目立って刻み込まれている。

松島はふと、ユカに何と言えいいのか、言葉を探して口ごもった。

「遅いのね……」

ユカはデスクの上で組み合わせた指を齧めて言った。「週刊誌の記者だと称する男が、今朝アパートまでやって来てね」

松島は、スプリングがカバーの下きで飛び出しているソファに腰を下した。

「それで……？ 何か喋ったの？」

「喋るはずがないだろう。三十分ばかりネバられたけど、ぼくは知らぬ存ぜぬさ」

「そう……」

ユカは松島の方を見ようとはしなかった。ユカの顔に

表情があると、何とも言えない家庭的な、温か味のある容顔に見えるが、今のようは無表情でいると、彼女は一变して、冷やかさそのものという感じであった。目は女らしく愛くるしいが、顔立ちは整いすぎているというせいだろう。

もともと、今朝のユカの表情が穏やかであれば、それはかえって不思議なことだった。

「もう、株主が二、三、集まっているようだけど……？」

松島は思いついたように、顔を上げた。

「ええ。芝沢さんと久留目さんね。そのほかに、業界の専門家らしい人も来ているわ。間もなく新聞、週刊誌の記者、証券会社の人たちが、傍聴に押しかけてくるでしょうね」

ユカは他人事のように言った。そういう口ぶりになるのは、ユカが事態拾収をある程度あきらめたからではないか、と松島は不安を覚えた。

「どうするつもりです？」

松島は思わず、引きつけられるようにユカの横顔に視線を据えていた。

「どうするつもりって……？」

ユカは固定させた顔を動かさなかった。

「総会で、方針通りやるんですか？」

「勿論よ」

「見通しは？」

「何の？」

「勝敗の……」

「勝敗？」

「そうですよ」

「そんなこと、関係ないわ」

「どうして？」

「じゃあ、訊くけど……。わたくしが株主総会で、経営責任者としての方針を押し通すということが、どうして勝敗に関係があるのかしら？」

「ユカさん、もし、あなたの主張が通らなかったら、あなたは明らかに負けですよ」

「……………」

ユカは沈黙した。言葉に窮したのである。その白けた横顔を凝視しているうちに、松島は、彼女と交渉が続き

たこの十年間というものが、俄かに短縮されて行くように感じた。

そう言えば、松島はユカとの間に交された言葉が、社長と総務部長がやりとりするそれらしくないことに気づいた。

社長に対する態度をと心掛けられるほど、松島の気持ちに余裕がないのかも知れない。そういう形式にこだわることの出来るのは、二人の日常に何の起伏もない時なのだ。嬉しいにつけ苦しいにつけ、生の感情を剥き出しにするような場合には、松島とユカの関係は社長と総務部長というものではなくなってしまう。それで二人の、親密度を計ることも出来るのだ。

《われわれの関係とは、一体何んだろうか……？》
松島はつい、そんな余分なことを考えたくなる。

「わたくしの主張が通らなかつたら、一体、どうなるのかしら」

ユカが思いなおしたように言った。

「結局、社長退陣を迫られるな」

松島は短くなった吸さしの火を二本目の煙草の先に

移した。二坪ほどの狭い社長室の空気は、煙草の煙りで薄紫色に染まっていた。

「そんなこと、ごめんだわ」

「ごめん、というところにユカは強くアクセントを置いた。」

「しかし、そうならざるを得ないよ」

「厭よ。わたくしはこの会社を手放すことは出来ないわ」

「何も手放すわけじゃないさ。ユカさんはこの太平製作所の大株主だからね」

「生みの親より育ての親っていうのは、何も子供の側から見た言葉とは限らないわ。親の方にしたって、子供というものは生んだだけではなく、育て上げるから可愛いものよ。この会社は、わたくしの子供よ。株主として遠くから眺めているだけなんて、とても耐えられないわ。直接の経営者として、つまり、わたくし自身の手でこの会社を育てて行きたいのよ」

「そのユカさんの気持は、よく分かる。しかし、世間というものは、特に実業界というものは、そう甘くはない

だろう」

「わたくしの考えが、甘いとも言うの？」

「いや、個人の感情を理解して、それを受け入れてくれる、というような余裕は生存競争の中にない、と言いた
いんだ」

「でも、わたくしの場合は別よ。わたくしがどんな気持ちで、どんなに苦勞してこの会社を作ったか、松島さんがいちばんよく知っているはずじゃないの」

「よく知っているよ。だがこの会社には、特別というこ
とは通用しないと思う」

「とにかく、わたくしはこの会社の経営から手を引くこ
とは出来ないわ」

ユカは吐き捨てるように言つて、回転椅子から立ち上
つた。松島はユカのデスクの上にある、小さな額写真へ
視線を移した。写真には中年の男女が、いかにも被写体
だというふうな四角張つて写っていた。写真は相当に古
く、七分通り黄色ずんでゐる。写真の男女はユカの両親
だった。

「しかしね、ユカさん。今日の総会に、本当に三津田さ

んを引つ張り出す気であるのかい？」

松島は、窓際に立つたユカの背中に言つた。彼女の肩
越しに、チョコレート色のビルの上半分が見えていた。

郵政省の庁舎だった。その向こうには、東京タワーの朱
色に近い鉄骨の交叉が突き出ていた。

「そのつもりだわ」

しばらく間を置いてから、ユカは答えた。

「新聞で報道されたような不正な点はないんだし、わた
くしにだって後ろ暗いところは少しもありませんから
ね」

「そう……」

松島は暗い気持ちになった。ユカの言うように、何の不
正事実も後ろ暗さもないのだ、とは松島に断言する勇氣
がなかったのだ。三津田誠まことという無名の一発明家の言葉
を、額面通り受け取つていいものか、松島には大きな不
安があった。

まして、その三津田の新発見というものを真に受けた
ユカが、株主たちのベテンだという非難に正面から対立
することは、非常に危険なのである。

その危険も承知の上で、あえて自分の主張を押し通そうとするユカの焦る気持は、松島にも頷ける。だが、ユカは、その執念に近い意欲のために、無理な背のびをしすぎているようだった。

確かに、棚の上の目的物はユカの指先に触れている。しかし、ユカの背のびによって、その目的物は彼女の頭上へ落ちかかっているとも言える。

松島は、見るに見えられないような不安に、目を固く閉じてしまっていた。

「ぼくは反対だ……」

彼は、幾ら反対してもユカの意志は翻らないと知りながら、そう口にしないうけには行かなかった。

「どうして反対なの？」

ユカは窓の外へ目をやったまま、肩だけを聳かした。

「三津田さんの新発明というものの信憑性に不安がある」

「わたくしは、三津田さんの研究結果を信じているわ」

「心から？」

「そう」

「しかしね、それほど真実性のある話なら、なぜ世間が疑惑の目を向けるのだろう」

「同業者の中傷や誹謗というものがあるわ」

「それだけのことで、警察が内偵を始めるかな」

「警察？」

ユカは振り向いた。ひそめた眉に、初めて不安の色が露骨に表れた。

「今朝アパートへやって来た週刊誌の記者から聞いたんだ」

「警察が、何の容疑で調べるっていうの？」

「詐欺容疑か、または証券取引法違反の容疑だということだ。警視庁捜査二課の会社事犯取締班が乗り出したらしい」

「そんな馬鹿な……!!」

「何でも、うちの社の株の売買で苦悩を甜めた大衆投資家たちが、捜査二課に泣きついたという話だった」

「うちの社……いいえ、わたくしのしたことが、どうしても刑事事件になるのかしら？」

「ユカさんも知っているだろうと思うけど、証券取引法